第57回（R4．9）

出雲弁よ永遠なれ

私は出雲市で生まれたが、父母は石見の出身である。従って幼少期、家の中の会話はほとんど石見弁であった。ある春の日の昼下がり、私は生まれて初めて出雲弁の洗礼を受けることになった。

その日、私は近所の悪ガキ共とおやつ代わりにイタドリの茎をかじっていたのだが、隣に座った大将格の少年が得意げに教えてくれた。

「**こーは　そっけて　くぁーと　まいけん**」何のことだ？意味が解らん。幼い私の頭はパニックに陥った。少年がポケットから大事そうに塩の包みを取り出すのを見て、「そ」とは塩の事であり「**こいつは　塩をつけて　食べると　美味いよ**」の意味だと初めて理解した。

二度目の洗礼は強烈だった。最初の赴任地雲南で老婦人と話していた時のことである。

「**よんべ　たわが　こつけまして　にゃ　おおはいごんでございました**」

な、何だって？「たわがこつけた」も解らないが「おおはいごん」に至っては、ただならぬ雰囲気が漂っている。

後で町役場の方に翻訳してもらい「**昨夜　峠で崖崩れが起きて　大慌てで大変でした**」と知った。今思えば彼女の言葉は標準語より、はるかに躍動感とリアリティにあふれている。恐るべし出雲弁。

今年も島大の野間先生から連絡があった。「学生に生の出雲方言を収録させたい。適当な人を紹介して欲しい。」数ある出雲弁の達人の中から精鋭中の精鋭三人をご紹介した。久保田幸悦氏、野津幸雄イマ子夫妻である。出雲弁が飛び交う社会、おんぼらとしていて悪くない